

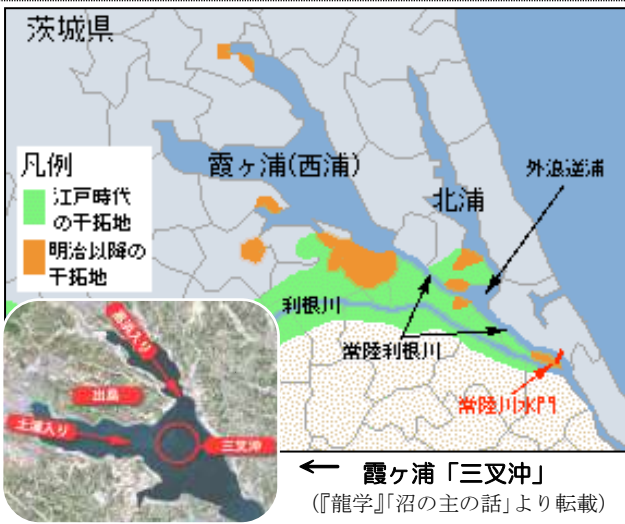
# A c a n t h u s

第65号

平成26年2月4日

茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会  
HP <http://www.sin-syu.jp/>

←  
「霞ヶ浦」全図 (『ローリング  
ウエスト逍遙日記』より転載)



## 霞ヶ浦(その1)～流海～

校歌に歌われている霞ヶ浦。遠浅で広い海跡湖(もともとは海の入江であったところが残ってできた湖)ですが、満々たる水をたたえ、人々に豊かな恵みと安らぎを与えてきました。

今回から霞ヶ浦とその周辺の人々の歩みをたどっていきます。

### 地理

霞ヶ浦は、わが国第二の大きさをもつ淡水湖で、面積は220km<sup>2</sup>。西浦(172km<sup>2</sup>)、北浦(36km<sup>2</sup>)、外浪逆浦(6km<sup>2</sup>)、常陸利根川(6km<sup>2</sup>)の4つの水域から成り立っています。「霞ヶ浦と北浦」などと表現される場合は、「霞ヶ浦」は事実上西浦のみを指しており、「霞ヶ浦」という名称は2つの意味で使われています(周囲(水際線延長)は249.5kmに及んでいますが、これは日本最大面積の湖である琵琶湖(235.0km<sup>2</sup>)を超える長さです。狭義の「霞ヶ浦」である西浦は、面積では全体の78%余りを占め、土浦方面に伸びる水域を「土浦入」、石岡方面を「高浜入」と呼び、両者が交わるかすみがうら市沖の広い水域を「三叉沖」と呼んでいます。水深は浅く、大部分が3mから6mで、平均水深4m、最大水深は西浦の三叉沖で7.1m、北浦で10mにすぎません。霞ヶ浦には、桜川・恋瀬川・巴川・小野川など、56の河川が流れ込み、年間流量は約14億m<sup>3</sup>、貯水量は約8.5億m<sup>3</sup>、その流域には約100万人の人々が暮らしています。その水面の標高は0m、湖岸の台地もせいぜい30m位で、日本第一の湖、琵琶湖と比べると、低平なところが特色で、独特の水郷景観を見せています。この景観を保立俊一氏(中31回卒)は「多くの人が霞ヶ浦の美について言っていることは、霞ヶ浦は水平の美である。周辺に山の無い霞ヶ浦の広漠ともいえる横に広がる景観にはすべての人をつつみこむ広い心を感じる。その広がりや霞ヶ浦の水平の美である。朝に夕に穏やかな光の中に広がる水面をみつめる時、その広さの中に心の安

らぎを感じるのには私ばかりでは無いと思う。」と述べています(『水郷つちうら回想』保立俊一著 筑波書林 1994(平成6)年刊)。

### 流海

霞ヶ浦の名称が定着するのは江戸時代であり、『常陸風土記』では「流海(ながれうみ)」「海水が流動していたところからこのように呼ばれたのだと思われ(ます)」と呼び、稲敷市側は「信太の流海」、かすみがうら市東部は「佐賀の流海」、行方市側は「行方の海」、利根川流域の低地は「榎浦(えのうら)の流海」と称しています。鎌倉時代に入ると和歌などでは「霞の浦」と詠んでいます。一般には、鹿島灘の「外の海」に対して、巨大な入り江、「内の海」と呼ばれていました。沿岸に遺された無数の貝塚(その数は関東地方全体の約30%といわれています)は、海水・淡水産など様々な貝殻が堆積し、寒冷化に伴う海退・淡水化と、温暖化に伴う海進・鹹水化がくり返されたことがうかがえます。上高津貝塚や陸平貝塚等の縄文時代の貝塚の分布から、当時の海岸線を推定できますが、それによれば霞ヶ浦の面積は現在の2倍を超え、稲敷市(旧東村)低地以南のいわゆる榎浦や潮来以南の浪逆浦(なさかうら)、それに北浦とも、とくに区別なく接続するので、全体としては琵琶湖に匹敵する広さであったことがわかります。

常陸国内の縄文時代の貝塚からは、豊富な魚介類を示す遺物が多数出土しており、はるか昔から水産物に恵まれた環境であったようです。貝塚から発見された釣り針やヤス・銚(モリ)・球状土錘

(魚網を下方に引っ張り、水中で所要の形状を保たせるために用いられるおもり)などの漁具は、材質は違うものの形態は今のものと大差がなく、釣り・刺突・網・わなといった現在と同様な漁法が行われていたことが分かります。



上高津貝塚では、復元された「竪穴住居」(上)、「製塩土器」(右上)、さらに海水を土器で煮詰めて塩をつかった「大型炉」(左)も見るができます

また上高津貝塚から出土した製塩土器などから、縄文時代後期(約3千年前)には霞ヶ浦で塩作り(日本で最初の塩作りかもしれません)が始まっていたことが分かります。当時の塩作りはまず塩分が付着した海藻を天日干しにし、さらにその海藻に海水をかけて濃い塩分を付着させます。その海藻を塩づくりのため底が尖った土器(製塩土器)で煮詰めて、結晶となって付着した塩を取るものでした。さらに時代が下って、713年頃編纂された『常陸国風土記』の信太郡の条には、「浮島の村の人々は塩を焼いて生活をしている」とあり、行方郡の条には「行方の海の津済(わたり)周辺には塩を焼くための海藻が生えている」など



と、当時の霞ヶ浦沿岸地域では塩づくりが行われていた様子が記されています。こうした塩作りの事実から霞ヶ浦が8世紀の初め頃でもまだ鹹湖(かんこ)塩水湖、湖水の塩分が、1リットル中0.5グラム以上の(湖)であったことは間違いありません。

### 東海道駅路

古代律令制時代の幹線道路である東海道駅路は下総国を経て、常陸国に入ります。『常陸風土記』(信太郎条)は使者たちが下総国から常陸国に入る際に、ついで次のように記述しています。

「榎浦津(えのうらのつ)あり、便(すなわ)ち、駅家(うまや)を置けり。東海道にして、常陸路の頭(はじめ)なり。所以(このゆえ)に伝駅使等(はゆまづかいら)、初めて国に臨まむとするに、先(ま)ず口と手を洗ひ、東に向きて香島(かしま)の大神を拜(おがみ)みて、然(し)こうして後に入る事得。」常陸国の玄関口には榎浦津という駅家があったこと、駅路が「東海道」と呼ばれたこと、常陸の国府(石岡)に向かう使者はここで口や手を洗い、東へ向いて香島の大神すなわち鹿島神宮を遙拝してから常陸国に入ったことなどが書かれています。津(港)の駅なので、船が停泊できる水辺近くに駅家があったことがうかがえます。

この信太郎の榎浦津駅は稲敷市柴崎地区にある新宿遺跡周辺が有力な候補地と考えられています。ここから先のルートについては、陸路を経て霞ヶ浦を船で渡り常陸国府に向かうコースが、かつては想定されていました。しかし、歴史地理学の木下良氏が空中写真と地形

図などから稲敷市下君山から阿見町飯倉までの直線道が東海道駅路にあたることを見出し、常陸国府まで陸路であったことを明らかにしました。つまり、榎浦津駅で常陸国に入った東海道駅路は、稲敷市、牛久市、阿見町を通り、土浦市の小松・高津付近にあつたとされる曾禰(そね)駅へと続いていました。さらに桜川を渡り、土浦市中貫から、かすみぐら市内を抜け、国府のある石岡市(国衙の正庁が石岡小、国分尼寺が府中小付近に建てられていました。国分寺の跡には現在も国分寺というお寺が建っています)に到りました。緊急時には早馬を駆け、すばやく情報を伝達することが駅路の重要な機能の一つであり、気象条件などに左右されやすい水路より、目的地まで最短距離で結ぶ陸路が重視され、直線道が造られたと考えられます。



古代の道路体系と東海道駅路  
 (『花見川流域を歩く』より転載)

### 海夫(かいぶ)

平安時代末期から室町時代にかけての香取神宮文書や鹿島神宮文書には「海夫」とよばれた人々が記されています。

海夫は、12世紀後半には登場して、霞ヶ浦の津々浦々で漁業を主とし、水上交通・商品輸送など操船の技術を生かし舟運なども生業としていました。

古代の律令制は、海を山川敷沢(さんせんそうたく)などの未開地と同じように、特定の人だけが独占すべきものではなく自由に利用できるものとし、養老令で「山川敷沢の利、公私之を共にせよ」と規定しています。しかし平安末期から南北朝時代にかけては、香取神宮や鹿島神宮の大禰宜に海夫たちの網や船へ課税する権利が与えられ、海夫たちは香取神宮や鹿島神宮に一種の年貢である祭祀料を献納し、そのみかえりとして漁業や水運などの特権を与えられ、「津」という港を拠点として、活動をしていました。しかし、南北朝時代に入ると、津は在地領主の支配下に置かれるようになり、1374(応安7)年、室町幕府は海夫を各在地領主から大禰宜の支配に戻るように命じています。香取神宮大禰宜中臣長房が起草した「海夫注文」(海夫たちから徴税をするための目録)は、平安以来、諸津から徴収されていた海夫税(通行税・船税)が、南北朝の混乱期に在地領主の支配が進んだ結果、未・滞納の続出で起こされた訴訟の証拠書類として提出されたもので、中世港湾(津)の分布を知る好資料となっています。そこには常陸の50余津、下総の24津が列記され、記載のないものも含めれば、沿岸には優に80を超える津の存在が推定できます。

しかし平安末期、律令制の崩壊とともに、領主の支配権が強化され、香取神宮や鹿島神宮の統制が弱まるにつれて、津



かつては海夫が活躍した現在の古渡の町(上)、「海夫注文」も含まれた「香取神宮文書」(右、千葉県歴史資料館蔵)より転載



も次第に自衛のための連合組織を形成し、霞ヶ浦・北浦を津の入会(共同利用地)の海として管理する「霞ヶ浦48津」・「北浦48津」に発展し、地名を今日に残すものも多く、比定地の特定も進んでいます。霞ヶ浦48津のほとんどは霞ヶ浦に注ぐ河川の河口に位置し、周辺には農業基盤となる小沖積地を伴い、城館や寺院が営まれていました。

この頃から、常陸国では、平将門の乱を制圧した平貞盛の一族であった多氣氏が常陸国府の大掾職を世襲し、その職名を名字(常陸大掾氏)として勢力を拡大していきましたが、鎌倉時代に入ると、小田城を拠点にした小田氏が台頭し、大掾氏に代わって筑波山麓霞ヶ浦周辺の一大勢力になっていきました。

(高21回卒 松井泰寿)

### 【参考資料】

- 『理想郷とよばれた常陸国』 2013・8
- 『かすみみがうら市郷土資料館』 2013・8
- 『帆曳網漁の世界展示解説書』
- 『かすみみがうら市郷土資料館』 2005・7
- 『古代のみちく常陸を通る東海道駅路』
- (上高津貝塚ふるさと歴史の広場)